

# 六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか  
chairman Yamada Rokko  
secondary c. and the  
editor in chief Kotari  
cover designed by little bird

1月号

輪

山田六甲

い 石橋にむしろ筵敷きあり 初はつ詣もうで  
ろ 炉ろに肘ひじを突いて餅焼く夕べかな  
は 羽子板に無む患くろ子の傷数あまた多なる  
に 庭駆けるにわとり鶏 恵方へと追へる  
ほ ほのかなる雲の明け来る恵方えほうかな  
へ 変調の船せんてき笛響く 去年こぞ今年ことし  
と 年の夜や明石大門おおとの渡し船  
ち 散らし書く賀状の恋の一首かな  
り 龍神の若井に杓しゃくの雫しずく落つ

ぬ 温ぬくかりとかまくら明あかり出て来きたる  
る 瑠る璃り色の鳥ときて鳴なげる四よ日にかな  
を 鴛おし鴦どりに水みづを讓まからずかい 鳩つぶ  
わ 若わ松かの針はりに刺ささるる小こ袖そでかな  
か 寒かん林りんに影かげ差さし込こめる松まつの幹み  
よ 佳よき夢ゆめのこことは暗あん号ごう初し日にち記き  
た たまゆらの空そらを飛とびけり姫ひめ始はじめ  
れ 蓮れん根こんの紅こう染ぜんめで屠と蘇そ祝いわひけり  
そ 即すなは答たの三さん歳さい児こなりお年とし玉たま

ことり

い 意味知らぬままに覚えて歌留多取  
ろ 炉にかざす指先染める年酒かな  
は 鼻筋の美しき女なり年賀客  
に 握り合ふ手の温かく初詣  
ほ 頬赤く染めつつ羽子を追へる子よ  
へ 塀越しに鮮やかに松淑気なる  
と 解き放つやうにどんどに火を投ず  
ち ちりめんのお手玉数へ去年今年  
り 両の手を初御空へと伸べにけり

ぬ ぬる 爛かんの 好きな お人よ 女め正しょう月がつ  
る 累る々いと 並 ぶ 頭つむりよ 初 詣  
を とここかと 見まごうやうな 賀状かな  
わ 湾 囲む 灯あかし消えゆき 去年 今年  
か 金網を 輝やかしたる 初日かな  
よ 読みて 閉ぢ 読みて 閉ぢして 初はつ御みくじ籤  
た 沢たく庵あんを ときを りつまみ 七なぬ日か粥ゆ  
れ 蓮れん根こんの 佳き 色 並ぶ 一いちの 重じゆう  
そ 袖 揺らし さやさや とゆく 春着かな

# 甕の中のぞくやうなり秋の海

## KOKIA

かめのなかのぞうくようなりあきのうみ

竹<sup>ちく</sup>春<sup>しゅん</sup>や瓦<sup>い</sup>飛<sup>と</sup>び出<sup>で</sup>す古<sup>こ</sup>土<sup>と</sup>塀<sup>べい</sup>

初<sup>はつ</sup>秋<sup>あき</sup>や二<sup>に</sup>歳<sup>さい</sup>となりし子<sup>こ</sup>を洗<sup>せん</sup>ふ

露<sup>る</sup>の窓<sup>まど</sup>うろこのやうな子<sup>こ</sup>の指<sup>ゆび</sup>紋<sup>いもん</sup>

林<sup>りん</sup>檜<sup>ぎ</sup>食<sup>は</sup>む子の齒<sup>は</sup>まぶしきほど白<sup>しろ</sup>し

真つ青な秋の海を見ていると当にこの句のような気分になる。甕の中を覗くようだ、という喩えが佳い。掲句を私個人に引き寄せて鑑賞すれば、それは明石海峡の秋の海である。あの海峡の青さをどのように表現したら良いのか、と、ずっと考えていた。それをKOKIAさんが見事に解決した。実際に甕の中を覗いても青くはないはずなのに、事実を超越して納得させる力がこの句にはある。子の指紋の句も素晴らしい。副主宰もこのような優れた作品に出会うと元気が出ると喜んでゐる。

ひとり遊び

貝森 光洋

秋あきすだれ簾ひとり遊びをしておりぬ  
ヒトの世は面白いかもぶっしゅかん仏手相  
来世まで擦り切れているいわし雲  
秋の暮くれ背中ばかりが増えてしる  
毬い割れて太った栗と瘦やせた栗

ほたる草

梶浦玲良子

耳もみぢ遠くなりし案山子を連れ帰る  
鴟もみぢの贄ほとほと違ふうじすじ氏素姓  
月の雨針山あまた色を垂れ  
山さんぶく腹へ登りゆく町鳥とりわた渡る  
ほたる草こぼれ流浪るろうの膝ひざをつく

雪 卿 集

棘とげき傷ず

笹村政子

枳から殻たちの実に棘とげき傷ずのなかりけり  
石垣いしがきに弾はじかれてゐる蟻あひ蛻たかな  
冬とう瓜がんの影冬瓜とうがんをゆりぬたる  
倚よりかかる柵さくの湿しりや十三じゅうさん夜や  
後のちの月つきふり仰もちぎたる篲かがり守もり

西す瓜い

松本文一郎

よしあしの音の不確たか西瓜きゅうり買かふ  
五つ六つ西瓜きゅうり転たがる三和土さんわどかな  
澄あむ水みづに駿げんを担かぎし五円玉  
台風たいふうの大枝小枝散ちらしけり  
鶏頭けいとうの黒く浮うき立つ日暮ひぐりかな

せつじゆしゆう  
雪樹集

大花火  
久永 ふう

軒端借り盆花を売る老婆かな

水を打つ日の傾ける軒先へ

観衆の眼一点大花火

涼風を紺の暖簾に感じけり

ゆく夏や波音のみの夜の浜辺

後の月  
池崎るり子

門燈の消され三日月輝けり

後の月勇姿まぶたに残りけり

カーテンの閉ざされしまま十三夜

か細くてとぎれ勝ちなる虫の声

紅葉して空の青さを引き出せり

# 六花集

六甲選

藤原 春子

ふたひらの落葉離れず水に浮く  
秋日受け睡蓮咲いてをりにけり  
水音を立てずに秋の落葉かな  
黄色の葉秋の水へと落ちにけり  
枯れぬたる葉もあり秋のひつじ草

松本 蓉子

秋風にさつと木の葉の散りにけり  
日の影に明るくなんばんきせるかな  
すすきの葉裏に錆色走りをり  
千枚の棚田を写す曼珠沙華  
木の幹のさけ目に白き茸かな